



紙法名法

老楓園藏

三

終

文 研
911.33
Ka16k
3



911.33
Kaibō
3



泊

越中



正田貞六

此泊中のいぬ下とま古は海にけり
出たりて其の殊更に西白の地あり
は目を雨ぬり風あはれては身を
らさせり本三四日自らわ我松
亭より行跡は目わをふり先て
六月浅何とてあはれ残る者云

正田貞六

下

早稲田大学大学院
文学研究科図書

澤城康隆
真蹟実習費
50-1182

任之亭

涼風や新酒をうよ彦持定 全

むくー本電居能たよ人
巴とい婢女もけ宮流うり
おさねとー教のふり能
乃よとらふくー

六月も巴のりも幸一お島 全

昇仙

松守

形く東能くろくをを夏持西

因桂のい立母ねふ侍とくく 支考

清操うろ清鏡れをるくあきて 西々

日とくクメ言のまのうあれやま 任之

流てい本よせりあよ月の照 華村

うろかたそ酒よとい想れ 麻千

10 葉をて見て飛緒のた浦へ礼の人 如晴
名をも何ぞや元服後 考
身代と種波入江のふれ泡
余所の十夜も曉表鐘 夕
之我道原立も月終るはくと
浦り淋しい李り一本村 之
は助と翁と若良と二人は道 子
は月母が居て今も残念 晴

東と舟便し九十六里 あり
は日そとらぬ今日ハえ長く 考
20 金杯も谷の奥ふと不呼く 夕
兼み 巧くも 教れくむ次 之
朝日さともちくみ言の消滅 村
寺と草くもそ志り 影ふり 子
連池もあま物志り 終るは 晴
家もあま物志り 終るは 月 中

尿^{シヒ}瓶^{ビン}の中へ尿^{シヒ}を注ぎて置く

桶より水をこの瓶に入れ

うへは蓋をききしめておく

そのものの蓋の中に入れて

³⁰つねにいい師をのぞく

この中へせしめたるもの

非^ヒとも備^ヒをひきしめて

此佛とて是をまくに極楽

後まごか神をくりし

葉の葉子のこをい

昔代かて送り人の舟場と

西へ入日かこゝ氣定は

この方と物あはるおま

はしれ中のみ勝よら

題

40 村をきけおの青田のあつゝ松
 お通りのあや眼をきく星 全
 旅人を教てやまし敷きし 雨夕
 暑ささうと出く是さあ志瓜うね 全
 使よき系船方涼し 如昔花瓜 華相
 つましくやあしは思てあま山子扇 全

50 けし綿結をみ風水し 雲は常 庵千
 均亦結んくけり種つ 雨雨の 心
 鳥や極み居らふて 世は流 河涼
 山人の背中 旅よあまふ 今
 50 揮一易名存の葉の上 涼わさく 如晴
 一雨しとわし 涼し なるみれ奇 如珪
 戸と明てあつゝ 雲のあや吹し 任之
 依渡山も越 涼み涼し 衣は月 星童

水の中は橋を以て因無双橋と云はれしは橋ありて兩岸より
 几階の橋を以て出でて左の岩壁ふりやわたり
 遊舟二艘を以て是をのりては重なる舟ありて
 ちとくしりてかゝりに流るる舟を以てかゝり
 同とぬきまてふにやとてたかひ事ありて橋
 二百余歩ありて一各ありて是部四十八歩の
 川上多流る千二万水乃を以て是をわたりては
 むハ流るる舟ありて是をわたりては是を以て
 一は内ハりは久きとてははるや

水や々々早あふれは橋乃霜 東華坊

兼作

諏訪奉納

諏訪松風

春風や波を吹く水あはれ心 夏老
 春風や神を吹く帆立貝 浦通

鬼江一巻

春かして鬼江は白く宮は松 徒意
 春かして鬼江は白く宮は松 秋吉

焼浦苔最

60
かけろつと保てて下流の石をよき 雲庭
まのほめ心まうたさや紅葉若 倚言

古城夕鴉

昔雨のそよ青みや夕夕の吹 俊翠
流しささけゆるさあふ夕夕 止水

海上蚌城

蚌の階やかしのむらさき次 佳真
蚌の日おやそだの鳴き声 外故

甲山有明

立卯や甲持甲のまろしうり 賢中
如口

生苑鉤船

重乃あくのまき一遠一海の家 新雨
海まで夕月をさかしては月 如水

僧嶽殘雪

70
夏は入の僧のまじしき事は去 水坡
まはは乃る重やまは下りて 雨村

東山六櫻

八重さくら遠くはくくふささけ 朋云
ス名は馬よ歌ありしはくく 林鳥

石田千鳥

百姓のままの身こそしきまのく 似云
流るるくもてくくくく日わら 光日

栗山時馬

岩瀬由西

川島はまき水防や月くもん

方枝

一言や目とくろくしの書と

帆白

多き船や一芝居とさしこれ多

吟洞

沖は帆も夕有風おひゆ多

水聴

龍仙

毎百金や流まわつらんノ清

浦通

80 夜 船と行と入るに船

西村

千羽龍と帆をさす舟と世と一書

文考

食はるし舟と史と船しと

枯吉

月代のろ舟とさしと瀧と初れし

久故

さすのつ舟とりゆ

水聴

あつたのすゝりふちうふすア〜と折る
池又、あやてふ所まゝの懸止水
しよふより短り〜なる部人侍言
くよめ舞勺の月わたつたに
田を種てま田魂ぬ夕月女 伝三
90 水涼〜いも新陸乃下 元弓
いほく〜軍持次をわら徳之 雲中
奥平〜つ〜十介も風流 傳真

あつたのすゝりふちうふすア〜と折る
池又、あやてふ所まゝの懸止水
しよふより短り〜なる部人侍言
くよめ舞勺の月わたつたに
田を種てま田魂ぬ夕月女 伝三
90 水涼〜いも新陸乃下 元弓
いほく〜軍持次をわら徳之 雲中
奥平〜つ〜十介も風流 傳真

荷はふしつしやうへし其処所
上野に言中やうしよ入色
一通り河原を渡らん橋の人
止らんかきつてふねとさる
英志の家のとこやうの沖
うまうまのふねのふ
止れば目もふとくまきく扶
まらまらあはれにちいさ
主

110
廿五の廿二日清一のあつた
くすくすのあつたあつた
傾城乃壺をこころのけつ置
庭の意とく人魚いあふ
一日よ十里のふと尋たのそ
たつたのあつたあつたの
水

秋高き

五ノ

春の夜もほろり水も又涼し

佳き事

千の酒も我れ涼し余の心

海月相見 柳雨具行

立山へ 剣と茶も 麦水

はるの山へ 麓をまよふの道へ
さうしては 屏の縁へ 杖を
剣と立山へ 杖を

神鼓 徒意 無行

春作へ 雪も 花も 春も ありけり

百代ののり 一も 春のかりのさくらん
才の傳言を 春も 花も 春の風の風
まよひや 花も 春も 春の風の風
人未だ 春ののり 春の風の風
よも 春の風の風

奥の山 秋も 花も 春も ありけり

石橋より石橋の石橋の石橋
中は風流をへたかき
くは流のきききききき
流よなれは流のききき

石橋より石橋の石橋の石橋

わーわーわーわーわー
あーあーあーあーあー

富士

大佛よ
あーあー

あーあー

120

富士の山は流の流の流の流

千代傳よ
あーあー

富士の山は流の流の流の流

あーあー
あーあー

富士の山は流の流の流の流

あーあー
あーあー

杉板まの

雪

杉板や君、下櫛清竹春雪

二川

杉多後まの月も杉のまの火ま考

櫛も世よ糸まのまの櫛まわて一庸

今いおしま左に清秋一爪

ま明も唐おのまの風ま音ま考

店櫛まおとに櫛ま音ま考

杉板まの

月

和片

杉板まの月

くのみまびまをま考一考一考

我の櫛まはま櫛まとわりの櫛ま

まの櫛まはま櫛まをま考一考一考

わ櫛まのあまらまの櫛まをま考

まの櫛まのあまらまの櫛ま

下

書

精はまの

も

豊田

玉のちりふるあはれは秋の光は

まのみにりけりけりけりけり

桐井

空のくわくはまたはるく

教目

近衛殿より呼ぶまの光

又考

140

涙のまをわたりけりけりけり

豊所

清のまのつむねは雨乃味二川

高田

口は三輪

初桐

初桐のまのまのまのまのまのまの

常のまのまのまのまのまのまの

龍潜の連新のまのまのまのまの

下

古

石灯籠

四月のや五月満るる灯籠 野角

井も葎の跡又も冬 路朝

我がいへ男百帯一糸細提く 支考

茶本殿

夕の光る井を思ふ茶本殿の匂ひけ 桃庵

¹⁵⁰ 冬一と十一くれまうとまてりく 河麦

¹⁵⁰ 大なる井をいしくと清きるわりく 支考

田舎

田舎や二串三串 冬は梅河麦

月ころやふりまきまの有明 為所

川におみわたる野成溝おく 支考

水仙

あはれ下陸子の香も日れあは 虚舟

二水もくくるとあめて涼ん 桃庵

怪鳥の二子と寝くらり侍とく 支考

病なみの海へさるる行のふ所
病子持陸子に當るがちれ
扱ふる花女のおりゝおなれ
あまのいらゝに霞江のぬ
編みかほまのらゆるおもひ
川のせらふ舟一本 舟

十丈亭

あこし一軒の行旅おのまて六日
ある別荘十月あつたかたて修
名をかきま結ひらういせうま
おのらむまをくまをたてけい
種をとうらふ

七葉

二葉うけはしを十月に初とる

鳥西一葉

うらなわくしと眠るふ度の本

丹波をうけ我々極楽松ありし
りのねをきき年のみ枯るるを
我々をききわたりて来るもの
そ人の妻よとてわけて今も男
下帯のおもひとて思ふ
まはしく風物よはけきりあはし
いあめのなまは人候はあそ一
まはりのみわたりあり

冷食や一柳女大黒女を梅支考

丹波をうけ我々極楽松ありし

石動

花は月のみあつていづれま
花は月のみあつていづれま
二丈と唄うてとれくは
山の風流とていづれま
うゝおの真まはてまの
何事やわたりたりと

丹

丹

卯花山

卯花山 卯花山 卯花山

考

卯花山 卯花山 卯花山

卯花山 卯花山 卯花山

卯花山 卯花山 卯花山

卯花山 卯花山 卯花山

卯花山 卯花山 卯花山

研波山

温故

霜月や音階かゝる研波山

其一文字ふきき集 蛙日

りふれふ乃狗舟籠 昼く 素

220 廿五子さふ子酒あり 共

ふさ青丸園まきく地玉白 日

芋の穂ぬく 月十 静 考

卯

卯

二上山

蛙曰

ふしあらうと音は化振ひけむらひ

妹かりり行り川ちりり帰支考

いしーいあふらまふ人しれー温故

顔をもとめて分別中口

名月もやうのついでついで考

ふもめか枯もわけて故

井波

謁浪化云廟

いあさうにすまうとして右と考

天か行我成花のふし考

まうと後ささきも也我考

匹後活みたひてそり考

をうりーと我をかき考

みまりて君さうに若下考

昔はよしの風物母あひれ若はあそ
て葉もははしくま来し我を推し
皆そのまおまきつらりてあいの
風物しつら母まむしとてお同し
あつち我とてそよ老の歌ふ入く
世のあそひのし久しかりぬとそ
こくこは海にまはれ流りぬとそよ
さあ母我の勝とてあつちのそ

所思

君よとてしねお声なりと冬地を

よあそ

よあそあいのそあめるゆとて

林三

物あそむとあしはく言ひして

尚書

人あそあきつらあいの外

水夏

二座とあそあ解のましとて

文全

あそとあそあしはれとほあつちのそ

元士

作

三

夜了ら寝し爲ら寝ぬまにみぢ也
去ん根とちふ城共何侍也
大根とまこ川あまともぬり言
嫁入こけのほいてぬまゆ
呉服屋と年くまぬを宿はて
十八日とあさひ 精を
まんと風情は清くす月の歌
お撰のあとのまよさく家
士

260
お下取人とも寝ると寝む人
詔所を候て橋は清く
吟物を一室に勝まやほく
はまよたら寝ぬまよふも
毛氈のよみ日の照るまのむ
まよまよ寝のまよまよ
也 今 侍 仕 地 人

二

二

城落

柔くとも月初りきりり
けりきりきりきり
けりきりきりきり
あつりきりきりきり
人ともあつりきり

花括

せんとあつりきりきり

庭ともあつりきりきり馬下り

あつりきりきりきり

川二あつりきりきり

富中のあつりきりきり

養子あつりきりきり

市二あつりきりきり

及あつりきりきり

徒分あつりきりきり

くわあつりきりきり

下

三十一

秋は香も涼もよきまの月
 うきあ節も風は涼し
 冷めもよきまの月
 傍も中しにも好しけし
 月のまよひも好しけし
 西の晴も乃小田もよき
 公馬も青もよき
 編みも好しけし

餞別

今一馬もぬらん
 旅人よき
 候ふもよき
 志はくもよき
 知足
 共風
 山之
 十治
 志

作

三十一

福光

巴分與救説

は杖も越後の言田あると云はれは事氏の令
とあるにりくふ何れも宿後のちうくは
はるるにり我々の杖を巴分ふあへり
越の各儀を多よとてむねますと云ふ
は杖のこあるとて風雅のなま一はさか
るや、杖も左とたきけて水雲万里
の人ふもあむ月常む此方りよ一月と

世をあらうま一りハ也杖は杖ハあひ
と云ふてサはえ川のがりくあやむむ
風雨のまぢうハ龍と化一とん事と
ねたるへ一は杖も杖のちと四人
とかりよあ履は何やあはし本履地
何れ短一はましくはくお我と後あひ
てかりよも履あらうとらうこのも彼
とくこあう宿ねとはとせんきうとふ
る一こあ一とは宿よあはれ一は
むらむらとちのく一とぬよは杖の法と

今や日影別と申されしやまゝ

東全坊

あまの杖よつらげ

志也連き木

月よひとる杖

杖はいろあつらよちりそり常此月 是通

むよあやう杖

²⁹⁰ 西行よし 眉まぬ絶てや花よ杖 品仙

庭なるうらまゝ杖

影乃る杖のちりしや病みう初 藤由

潜よまはけ杖

類人まはけしや杖よはけし初 柳土

川よむ杖

こゝろや柳や杖と右むしり 山葉

坂こゆる杖

まきと端む杖や強まそひの音 音次

F

二F冬

後生と縁ふ杖

お十重杖や西の方十万里馬言

記念の杖

乃如杖一室を我々の杖巴字

と西二条下町

かゝる杖は板行

手記

